

風土記のふるさと

下大野元気プラン

---Let's begin---

子どもの声が響き・安全安心・強いキズナで結ばれる

みんなが家族のようなまちに



下大野のコミュニティとは

ことわざに、親しくしている隣近所を表す「向こう三軒両隣」という言葉があります。こうした単位が、坪や常会を構成し、地域社会で非常時の共助、喜怒哀楽を共にしてきました。

昭和の時代、十九夜講、子安講、三夜講、針供養という民間信仰の集まりがありました。陰暦の当日、女性たちが集まり安産や子育ての祈りを通して、息抜きに雑談をして懇親を深める行事でした。男たちにもまた、庚申の日には徹夜で懇親する庚申講がありました。

こうした行事は、なにものにも勝る住民交流の場で、困りごとと悩みごとを分かち、生活のリズムにしてきた

のです。現在では、こうした地域共同体を一括りして、コミュニティと表現し、著しい自然災害や治安を反映した、新たな安全安心の仕組みづくりが強く求められています。

古来、何事も自発的に処理してきた集落も、文明の進展とともに生業の多様化、人口の減少などで地域の連帯がくずれ、承継が危ぶまれるようになりました。かねて、大きな足跡を残してきた青年団、婦人会（現女性会）、老人会（現高齢者クラブ）などの組織も、古き良き時代だけにとどまることなく、これからのコミュニティをオール下大野で培っていかねばなりません。

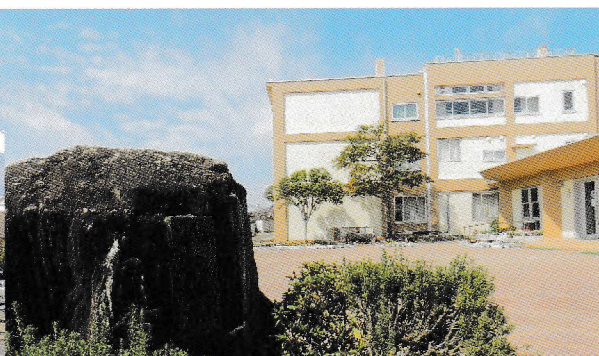


住みよい下大野をつくる会

1, 子は地域の宝、未来へともに歩む

「地域、学校・保護者との連携」

少子化については、社会的な問題として地域を問わず深刻な問題です。元気な地域を維持するには子どもたちの力が重要です。令和6年度、下大野小学校に通う児童は72人。子ども会育成会の運営も既に町内会単位ではなく、下大野地区連合会としての活動となっており、さらに広域的な活動が求められています。



主な取り組み

- ☐ 地区会・公的機関の積極的な関与により、保護者の負担軽減
- ☐ 子どもたちが参加するイベント等の増加（郷土カルタ大会等の復活）

「子ども見守り活動の発展」

子どもたちが登下校中に犯罪被害に遭うケースが増えており、地域全体での見守り活動が重要です。地域では令和5年から小学校との連携によって、有志による見守り活動を、散歩のついでなどに、無理の無い活動をお願いしています。また、腕章やジャケットを提供して、地域からの認知度を向上させています。



主な取り組み

- ☐ 学校活動への積極的な参加（児童と地域の人との顔の見える関係）
- ☐ 新規協力者を募り、小学生の登下校時以外にも活躍の場を増やす。

現行 13 人 → 20 人



ダイダラボウも見守る下大野小学校

2, 安全安心、防災のまちづくり

「水害・津波から身を守る」

那珂川と涸沼川の合流域にある下大野地区は、特に水害による災害を長年経験してきました。令和元年の台風災害は記憶に新しく、地形的に急激な事態悪化はないことから、人的被害は少なかったものの、住宅や農地への被害は免れませんでした。東日本大震災時には津波被害も経験しており、南海トラフ地震の発生など、予想される今後の自然災害には万全の警戒をしなければなりません。



主な取り組み

- ☐ 避難所設置・運営管理訓練の実施（宿泊を伴う）
- ☐ 避難訓練等の継続実施（危機感の持続・慢心の排除）年1回の定例化
- ☐ 将来的には那珂川・涸沼川の堤防建設促進

「ご近所の声かけ・助け合い」

近年、関東近県で多発している強盗盗難事件など、都市圏以外でも「対岸の火事」ではなくなっています。情報化時代でどこでも誰もがその標的となってしまうことから、地域のパトロールなどで、犯罪者を寄せ付けない地域の力が求められています。パトロールには、防犯効果はもちろん自身の健康増進や、高齢世帯の見守り・ご近所の助け合いなどの効果も大いに期待できます。



下大野二区の防犯パトロール

主な取り組み

- ☐ 下大野2区で実施している定期パトロールの（全6地区）へ展開
- ☐ 子ども見守り活動との連携と拡大
- ☐ 活かそう回覧板、身近で見守る常会（班）のチカラ

3. 地域のふれあいと強いキズナのまちづくり

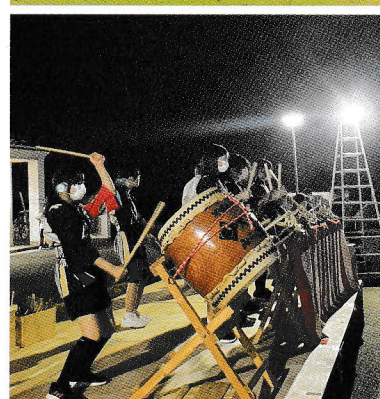
「住民総参加のふれあい事業」

下大野はスポーツにおける各町内会の対抗心が強く、運動会などでは予選会を開くなどして挑み、盛大な祝勝会・反省会を行い、地区の団結力の源としていました。この闘争心こそが地区の絆を深め、多少の不満を抱きながらも、最後には喜びを爆発させ、コミュニティを強固なものにしていたはずです。

したがって、時代が移り考え方が変化する中でも、地区住民が一堂に介し、顔が見えるイベントを実施していくことが、スポーツのみならず文化活動においても仲間づくりに大きな意義があると考えます。

主な取り組み

- ☐ イベントのPR強化と、町内会としての参加
- ☐ 三世代交流お月見会・皆コーまつりの充実
- ☐ 町内会組織におけるレクリエーション担当の確立
- ☐ 情報伝達ツール（メール等）の整備



お月見会

「愛郷の心を育てる」

生まれ育ってきた我が郷土、これから生きていく伸びゆく郷土。自分が住む地に誇りを持てなければ、住みよい下大野はつくれません。

下大野村が常澄村に合併した昭和30年に約4000人が暮らした下大野は現在約2500人。核家族化が進む中で人口減は仕方ありませんが、住みよいまちづくりを進めるには、それにあらがってでも、団結してふるさとを守っていかなければなりません。そのために、お隣と、ご近所と、町内会と交流を深め話し合い、誇りの持てる郷土、愛郷の心を強めたいものです。



皆コーまつり

主な取り組み

- ☐ 郷土の歴史を振り返る資料の提供（冊子の発行）
- ☐ 下大野地区が持つ魅力の再発見とアピール

その他には

「大野みろく囃子の継承」

下大野には古来より郷土芸能が伝承され、ここで生まれ育った者にとっては、国の無形文化財に指定されている、「大野みろく囃子」に携わることで、郷土の歴史を知り、文化を知り、人の有り様を知る貴重な地域財産として受け継がれてきました。

今でも下大野小学校5・6年児童がカリキュラムの一環として、大野のみろくを習得し、小学校の運動会・福寿の集い・ダイダラボーマつり・皆コーまつりで成果を発表しており、保存会活動と供に地域が誇れるものとして守っています。



「仲間づくりで活気を取り戻す」

地域で以前活動していた「高齢者クラブ」や「女性会」活動がなくなってから久しいところです。住民の生活様式の変化や、複雑な人間関係からの回避など、それに至った経緯は理解できるものの、地区会全体における、縦横のつながりがなくなってしまった代償は大きいです。一度なくなったものの再構成は難しいながらも、「孤立せず、誰しも取り残さない」ためにも、現状で活動続ける（塩崎悠々生活クラブ）等の活動支援と、それを他地区へ拡大させるとともに、市民センターの講座等とも連携して、仲間づくりを支援して参ります。



塩崎悠々生活クラブ

「大洗鹿島線を育てる」

大洗鹿島臨海鉄道は、昭和60年に開通し多くの利用者に愛され、常澄駅においては唯一の玄関口として、最近まで塩崎地区の婦人組織の清掃活動などが行われ、地域が守っていくべき場所とされてきました。地区会では、地区の誇れる場所として、駅前広場の草刈り・清掃をしながら令和5年から新たに一部樹木を市から借り受け、イルミネーションを装着して、冬の駅前を暖かく照らす試みを始めました。今後も利用者及び地域の賑わい・憩いの場として、自主的な清掃活動を実施していきます。



「下大野の未来」

豊かな農村地帯として発展してきた地区ですが、将来的な河川の堤防整備等を契機に、人を呼び込むための官民の施設誘致や住宅・空き家対策など、行政への働きかけの必要性も視野にいれて参ります。



未来へはばたけ 新那珂川大橋

始めよう！とにかく始めよう。 Let,s begin

★水戸市洪水ハザードマップ

那珂川・桜川・酒沼川

令和2年改訂版

稲荷第二市民センター
(洪水時一時避難所)

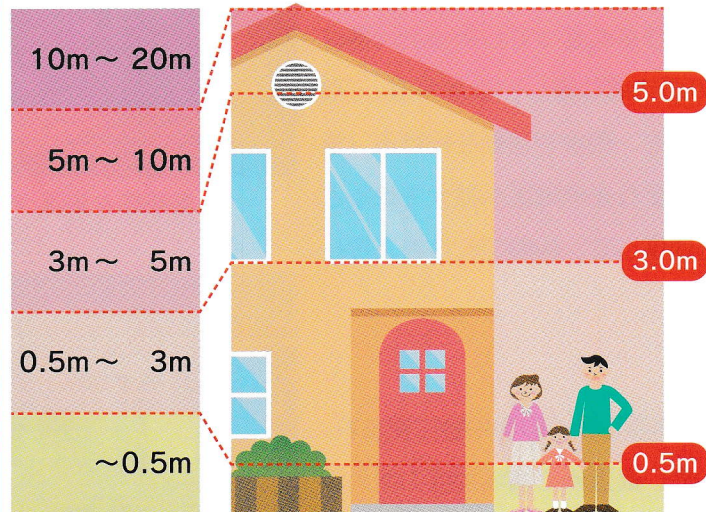
稲荷第二小学校

洪水時一時避難所
下大野市民センター

洪水時一時避難所
下大野小学校

福祉避難所
グリーンハウス水戸

洪水浸水想定区域の見方



石川川

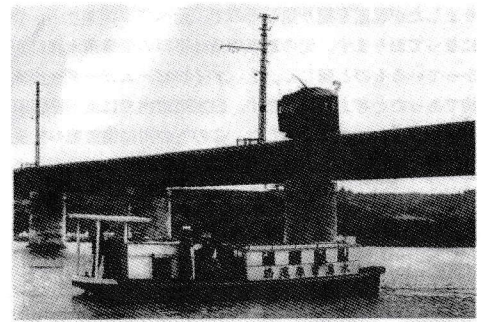
大場市民センター(洪水時一時避難所)

大場小学校
(洪水時一時避難所)

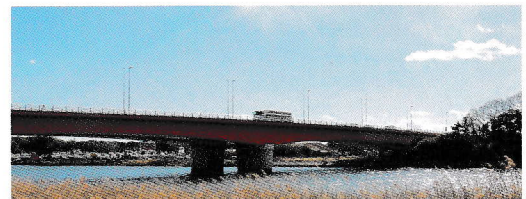
東水戸道路

下大野の歩み

- 明治22年 5大字で下大野村が発足する。
(戸数 430、人口 2,642、面積 9.78 平方キロメートル)
塩崎尋常小学校、下大野尋常小学校と改称する。
- 25年 塩崎に3ヶ村県立常澄高等小学校が開校する。
- 大正 3年 役場を小泉 215 番地に建設、4年開庁する。
- 11年 水浜電車が開通、塩ヶ崎、平戸に停留所が出来る。
- 12年 水浜電車株式会社から、家庭電気を導入、普及する。
- 昭和 4年 小泉～湊間の那珂川に、関戸橋が完成する。
- 9年 村青年団が皇子ご降誕記念事業として、下大野公会堂を建設する。
- 13年 16年の2回、那珂川大洪水(流域被害甚大)、関戸橋大破する。
- 15年 下大野村野中組合、模範組合として農林大臣賞を受賞する。
- 18年 食糧増産のため、地区全家庭の共同炊事を開始する。
- 23年 下大野農業協同組合が設立する。
下大野中学校が開校する。24年新校舎落成する。
- 27年 耕地整理事業を開始する。
小泉～那珂湊間に湊大橋が開通する。
- 28年 下大野農協で製パン事業開始、下大野小学校で完全給食始まる。
- 30年 常澄村になる。(合併時、下大野の戸数 671、人口 4,007)
- 33年 下大野中学校を、常澄中学校に統合する。
- 37年 簡易水道が完成する。プロパンガスが普及する。
- 41年 日本最初の農村集団電話を導入、普及する。
大野みろくばやし、県指定民俗資料文化財になる。
- 43年 下大野幼稚園が開園する。
- 48年 村防災無線網、放送を開始する。
- 56年 塩崎地内に常澄健康管理トレーニングセンター竣工
- 60年 大洗鹿島線開通。塩崎地内に「常澄駅」を開設。
- 平成 3年 塩崎地内に、大串貝塚ふれあい公園が開園する。
- 4年 水戸市に合併、各大字が町となる。
- 5年 水戸市南消防署常澄出張所開設
- 11年 区制の廃止に伴い、住みよい下大野をつくる会が発足する。
水戸高等特別支援学校・産業技術短期大学校開校
- 12年 下大野町内に、水戸市下大野公民館が開館する。
- 22年 水戸市下大野市民センターと改称する。
- 30年 下大野小学校プログラミング教育重点推進校に
- 令和 3年 再圃場整備事業が開始



水浜電車
—水戸から大洗・湊へ— から



現在の2代目湊大橋



大洗鹿島線開通式



水戸高等特別支援学校・産業技術短期大学



再圃場整備事業 小泉地内